

平成28年度 発達障害の可能性のある児童生徒等に対する早期・継続支援事業
(発達障害早期支援研究事業)
成果報告書(概要版)

実施機関名 (鳥取県教育委員会)

1. テーマ

学力向上と不適応行動の未然防止を目指し、「T式ひらがな音読支援」及び「多層指導モデルMIM」を活用したひらがなの読みの困難さの早期発見と早期支援のあり方について研究する。

2. 問題意識・提案背景

本県において、発達障害の診断を受けている幼児児童生徒数が年々増加しており、通常の学級における個に応じた指導・支援の充実が求められている。そのような中、鳥取県において、学力向上及び不適応行動の減少を目指し、読みのつまずきの早期発見と早期支援を充実させたいと考え、平成26年度から「発達障害の可能性のある早期支援研究事業」において「T式ひらがな音読支援」及び「多層指導モデルMIM」に取組、県内2市において実践研究を行い、読みの改善とともに読む意欲や語彙力の向上につなげるなど一定の成果が見えてきた。

しかし、小学校低学年における読み書きのつまずきに対し早期発見・早期支援することの必要性や重要性の理解は進んできてはいるものの、地域・学校間の取組に格差のある現状が見られる。持続可能な取組とするために、引き続き、学校の取組状況を把握しながら、学校協力体制を整えたり、実態に応じた効果的な指導・支援体制の構築を図ったりすることが必要であると考えます。

3. 目的・目標

県内2市(鳥取市・倉吉市)において発達障害支援アドバイザーを各1名ずつ配置し、「T式ひらがな音読支援」及び「多層指導モデルMIM」を導入・活用し指導実践を行い、2地域の取組の成果を県内に情報発信し、小学校低学年における読み書きのつまずきの早期発見・早期支援のシステムづくりの構築を進める。

鳥取市においては、「T式ひらがな音読支援」を小学校1年生全員に導入して、ひらがなの読みに困難を生じている児童を早期に発見し、早期支援を講じる。また、1年次のひらがな支援で最終的に基準値に達しなかった2年児童を対象に語彙指導を行うことにより、ひらがなを流暢に読む力を育てる。

倉吉市においては、全小学校の1年担任、特別支援教育主任、特別支援コーディネーターのMIM研修会への参加を進め、校内体制整備の構築を図る。また、全小学校13校の新1年生への読みの調査を実施し、支援を要する児童への継続的な支援を行うとともに、通常の学級における授業づくりについて取組を進める。

4. 主な成果

鳥取市において、1年生へのT式ひらがな音読支援及び2年生への語彙指導が、市内全小学校の取組として定着してきた。学校の協力支援体制が整い、担任が子供の成長に喜びと感謝を示した例や、家庭と連携して児童の読みが大きく改善し、信頼を深めた例も見られた。

倉吉市において、1年生の授業実践を通して、視覚化・動作化を効果的に取り入れたり、特殊音節指導の進度に合わせ多様な学習プリントや文字カード・パワーポイントを活用して定着を図ったりし、年度末の学力検査では、「長文読解」や「語句・語法」の結果が高得点となる成果が見られた。

5. 指定校における取組概要

鳥取市及び倉吉市に、それぞれ発達障害支援アドバイザーを1名ずつ配置した。

【鳥取市における取組】

①学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒の明確化

今年度は、T式ひらがな音読支援について、第1回・2回検査1年生を全員対象とし、それぞれ基準に達しなかった児童対象に5分×21回の音読支援（単音）を実施した。

②学習面（「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」）で困難を示す児童生徒に対する指導方法の改善・工夫

全ての教科につながる「読む」に視点をあてた「1年次ひらがな音読支援」、「2年次語彙指導」の効果をあげるために、全小学校対象にひらがな音読支援・語彙指導についての理論的な裏付けと効果的な支援方法を周知・演習した。第1回音読確認の結果、著しく読みが困難な児童（1分間に読めた文字が20文字以下）について、発達障害支援アドバイザーが学校訪問を実施し、学習面や音読支援における課題について聞き取りを行い、支援方法の確認・検討を行った。（21名対象16校訪問）年度末、最終確認で基準値に達することのできなかった2年児童の在籍校を訪問し、確認の経緯と3年次の支援について協議した。（26名対象16校訪問）。学校訪問で「漢字も覚えにくい」という情報を得たため、1・2年で出てくる漢字を組み合わせた2文字熟語カードを作成したり、初見の文章を読むことへの抵抗が大きい実態に対して、スラッシュカード1・2年用を作成したりして、ひらがな音読支援や語彙指導を実施している学校に配信した。

③行動面（「不注意」「多動性－衝動性」）で困難を示す児童生徒に対する指導方法の改善・工夫

一斉授業（一斉指導）において、「多層指導モデルMIM」の一部を取り入れた指導（希望校）の実施、放課後補充指導等の個別の指導において「語彙指導アプリ」を活用した語彙指導（1年生時にひらがな音読の習得が不十分と判断された児童の2年生時の支援）を実施した。

【倉吉市における取組】

①学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒の明確化

日頃の学習・生活面、さらに「MIM－PM」の結果等から一人一人の実態の変容を把握し、得意な面・不得意な面の明確化、「読字に対する意識アンケ

ート」の実施、移行支援会議や市教委・子供家庭課の学校訪問による把握を行った。

②学習面（「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」）で困難を示す児童生徒に対する指導方法の改善・工夫

教室の環境調整、視覚・聴覚支援、分かりやすい指示、座席の配慮・声かけ等を心掛け、分かりやすい授業の実践に努めた。また、学習進度に応じた学習プリントを活用し、繰り返し練習することによって定着を図り、宿題にも活用した。MIMプリント、市教委作成オリジナルプリント、カード類、パワーポイント等を活用し、スモールステップによる学習の進め方を実践するとともに、楽しくゲーム感覚で学習の定着を図る活動も取り入れた。さらに、学年団の教員、級外職員の協力を得、チームティーチング・少人数指導・取り出し指導等を行った。

③行動面（「不注意」「多動性－衝動性」）で困難を示す児童生徒に対する指導方法の改善・工夫

1学期から「読むことが苦手」「個別指導が必要」な児童に気づき、授業中の声かけや、座席への配慮等に早い時期から取り組むことができた。また、学年単位、低学年部、校内支援会議等多くの職員で児童の実態について話し合い、級外職員の協力のもと取り出し指導を行っている学校が増えてきた。さらに、担任・校内支援会議等で十分検討し、専門機関との連携をとる事例も増えてきた。専門機関と市教委との連携も深まり、ニーズに応じた支援の話し合いも始まった。

6. 今後の課題と対応

【鳥取市における取組】

ひらがな音読支援・語彙指導ともに、市内全小学校の取組として定着し、協力支援体制が整ってきたが、一方で、学校の温度差や担任のひらがな読みの重要性のとらえ方には差が見られる。今後は結果をもとにした学校訪問だけでなく、発達障害支援アドバイザーが学校における支援場面に携わってアドバイスをする学校訪問も増やしていきたい。

「多層指導モデルMIM」に関しては、4校の実施であり、ひらがな音読支援との相関等ははっきりした結果は得られなかったが、「多層指導モデルMIM」を取り入れた授業に関するワークショップなども検討していきたい。

【倉吉市における取組】

1年生全担任への「多層指導モデルMIM」の研修が十分とは言えず、データの分析、教材の効果的活用を進めるために学校訪問の充実に努める。また、4・5月時の支援を必要とする児童の実態把握力を高める必要性があり、就学前からの情報と合わせ、入学直後の「ひらがなの読み」の実態調査結果を活用し、5～6月から読むことが苦手な児童への支援を開始する。引き続き、2年生以上の継続支援も含めニーズに応じた具体的支援・配慮の実践を全小学校に広める必要性があり、校内全職員への取組に対する理解・啓発を行い、児童への支援体制の構築を進めていく。

7. 指定校について

鳥取市及び倉吉市の全小学校を指定

8. 問い合わせ先

組織名：鳥取県教育委員会事務局

- | | |
|-------------|---------------------------------------|
| (1) 担当部署 | 特別支援教育課 |
| (2) 所在地 | 鳥取市東町一丁目 2 7 1 |
| (3) 電話番号 | 0 8 5 7 - 2 6 - 7 5 9 8 |
| (4) FAX 番号 | 0 8 5 7 - 2 6 - 8 1 0 1 |
| (5) メールアドレス | tokubetusienkyoiku@pref.tottori.lg.jp |